

ルカによる福音書13章10-35節 「最後の肥やし」

1A 頑ななユダヤ指導者 10-21

1B 安息日の解放 10-17

2B 膨張する神の国 18-21

2A 努力して入る狭き門 22-30

3A エルサレムへ哀しみ 31-35

本文

ルカによる福音書 13 章を開いてください、今晚は 10 節から読んでいきます。私たちは前回、イエス様がユダヤ人の群衆に対して、強い警告の言葉を語られた部分を語りました。群衆に欠けていた意識は、「自ら進んで」という態度です。群衆とは、その流れに沿っていくことに特徴があります。ユダヤ人の指導者が教えていることを漠然と受け入れており、主体的に自分で考えていないという問題がありました。天気の徴は見分けることができるのに、時代の徴は見分けられていないと仰いました。

けれども群衆の中で、ピラトがガリラヤからのユダヤ人を殺して、その血を彼らのささげるいけにえに混ぜたという話を持ってきた人がいます。彼らの関心は未だ、表面的なのです。そうした政治的なことをイエス様に持ってきており、根本は自分自身が滅びから免れるために悔い改めなければいけないのです。誰々がこのような目に会っているという、他人行儀の見方は私たちの霊を殺してしまいます。

そこでイエス様は喩えを話されました。いちじくの木が三年経っても実らせないので、主人が切り倒せと言ったのですが、番人があと一年待ってください、肥しを入れてみるから実を結ぶかどうか見てくださると頼みます。これはイエス様ご自身の心でした。イスラエルの民が実を結ばない、けれども、あともう少し猶予をくださいという願いです。私たちは今晚、このイエス様の苦悩を読むこととなります。あと一年しかないというような、残り少ない救いの機会についてお語りになっている場面です。それでも応答しない人々の姿を見ます。

1A 頑ななユダヤ指導者 10-21

1B 安息日の解放 10-17

13:10 イエスは安息日に、ある会堂で教えておられた。13:11 すると、そこに十八年も病の霊につかれ、腰が曲がって、全然伸ばすことのできない女がいた。13:12 イエスは、その女を見て、呼び寄せ、「あなたの病気はいやされました。」と言って、13:13 手を置かれると、女はたちどころに腰が伸びて、神をあがめた。

以前もしばしばあった、安息日でイエスがシナゴークでラビとして教えておられた時に行われた奇蹟です。病の霊によって腰が曲がっていた、とあります。16 節で、「十八年もの間サタンが縛っていた」とイエス様は言われます。したがって、これは単に病による苦しみ以上の、霊的な抑圧であることが分かります。神がエバを惑わした蛇に対して、地を這うようになると呪われましたが、サタンは自分と同じ運命の中に、この女を入れています。天を見上げることのできないようにし、呪われた地をいつも目にしていなければいけない、地の塵を嘔むような生活であります。そして主が手を置かれたら、その腰が伸びました。そして神をあがめています。このすばらしい神の御業に対して、会堂管理者がどのように反応しているかを次に見ます。

13:14 すると、それを見た会堂管理者は、イエスが安息日にいやされたのを憤って、群衆に言った。「働いてよい日は六日です。その間に来て直してもらうがよい。安息日には、いけないのです。」

会堂管理者は、単にその建物を管理する人ではなく、律法も管理する霊的な指導者でした。その彼が、すばらしい神の御業に対して、賛美ではなく憤りで満たされています。イエス様に対して語っているのではなく、自分の教えている群衆に対して、安息日には働いていけないと教えました。これが当時のユダヤ教の正統な教えであり、律法の解釈でした。

ここで会堂管理者が、人間的には決して無碍なことを話していないことに注目してください。この女は十八年もこの状態だったのだから、今この時に癒しを受けなくてもよいのです。あと一日待つて、安息日ではない時に癒すこともできます。しかし、イエス様は敢えて安息日にこの奇蹟を行われたのです。三十八年間足なえの男も安息日に立ちあがったし、生まれつきの盲人も安息日に目を開いていただきました。その時にイエス様は敢えて、つばで泥を作って彼の目に塗りましたが、それはミシュナと呼ばれるユダヤ人の口伝律法に、つばで泥を作ることが働くことに値するという説明が書かれているのです。

ここから、何が言えるのでしょうか。神の御業は、人の常識の中で動くのではないということです。しきたりがあって、そのしきたりに従って、その中で神の国があるのではなく、そこに命の御霊の働きがあるためには、神のなさを第一にすること、それがたとえ常識と対立しても、神のなさを優先しなければ、イエスを主としていないし、神を神としていないということです。

ユダヤ人の指導者がそうであったように、私たちキリスト者もキリスト教式の常識を作っています。神の御霊がこう働いているということなのに、「こうであるべきだ」という枠組みを作っており、それ以上動かないようにしている、ということです。神はそのような心配もご自分のところに持ってきてもらえれば、それを何とかしてくださるのに、自分のところにもってしがみついているのです。アメリカのあるクリスチャンの家族の話ですが、お父さんが主に示されて中南米のどこかの国に福音を伝えることを示されました。奥さんが反対したのです。それでは子供たちに教育を施すことができない、という理由で。それでいつの間にかその話は立ち消えになりました。そして何年も

経って悲しいことが起こりました。離婚したのです。教育のためという常識がありましたが、神の御霊の働きを阻んだので、離婚という最も教育上良くないことを行ってしまったのです。

エジプトにおいてパロが、常識の中で動きなさいとモーセにいろいろ妥協案を出しました。壮年だけが出ていきなさい。家畜まで連れて行ってはならない、等々、「主に仕えてもよいが、これこれは、やらないでいなさい。」という条件を付けるのです。これが霊的に私たちを殺すのです。

13:15 しかし、主は彼に答えて言われた。「偽善者たち。あなたがたは、安息日に、牛やろばを小屋からほだき、水を飲ませに連れて行くではありませんか。13:16 この女はアブラハムの娘なのです。それを十八年もの間サタンが縛っていたのです。安息日だからといってこの束縛を解いてやってはいけないのですか。」13:17 こう話されると、反対していた者たちはみな、恥じ入り、群衆はみな、イエスのなさったすべての輝かしいみわざを喜んだ。

人が律法主義に陥っているかどうかを測るには、偽善に陥っているかどうかを調べるとよいです。二重基準を持っているかどうか、であります。これだけ人が動いてはならないと言っているのに、彼らの口伝律法の中には、動物に水を飲ませにやってよいという項目があるのです。自己矛盾に陥っています。律法主義はいろいろな形でやって来ます。今の時代は「愛」とか「平和」という言葉に気をつけないといけません、そこには律法主義が入り込みやすいです。聖書にも、この言葉が最高の価値が置かれているのですが、例えば、「あの人は愛がない」と言います。けれども、「愛がない」と言いながらその人を愛さずに、裁いているという偽善があるのです。

そして、「この女はアブラハムの娘なのです。」とイエス様は言われます。ですから、神のかたちとして造られた人であるばかりでなく、アブラハムの祝福を受け継ぐべき、神に愛され選ばれた子孫であるということです。ところで、12 節にあるイエス様の女への呼びかけには、ギリシヤ語には「婦人よ」という、女性に敬意を示した呼び名が使われています。イエス様は、一人一人の女性を、たとえ腰が曲がっているような人にも、神のかたちとしての価値を、またここではアブラハムの子孫としての価値を示しておられます。

このようなイエス様の目を持ちたいです。イエスさまが何かをなされる時の動機、それを突き動かす動機は、「憐れみ」でした。それは腹から感じる所の、「断腸の思い」という言葉が相応しい、どうしようもなく憐れむ、その憐れみです。そして、神の言葉の通りに、神の契約の通りに、人々を見ます。この女の場合はアブラハムの契約の中に入っている人としてみなしましたが、私たちはキリストにある者にも、そこには神に選ばれ、愛されている息子あるいは娘という見方をしているでしょうか？

2B 膨張する神の国 18-21

13:18 そこで、イエスはこう言われた。「神の国は、何に似ているでしょう。何に比べたらよいでしょ

う。13:19 それは、からし種のようなものです。それを取って庭に蒔いたところ、生長して木になり、空の鳥が枝に巣を作りました。」13:20 またこう言われた。「神の国を何に比べましょう。13:21 パン種のようなものです。女がパン種をとって、三サトンの粉に混ぜたところ、全体がふくれました。」

この神の国についての喩えは、解釈が正反対に二つに分かれます。一つは、福音が広がって、全世界が総福音化されるというものです。「空の鳥が枝に巣を作る」という表現は、ネブカデネザルが見た夢に出てくるもので、バビロンの国が大きくなって、その繁栄の中に生きている者が憩う、という意味があります。そして同じように、パン種の喩えも全体に福音の種が広がるという見方をします。

「神の国」とありますし、私もそのように思いたいです。確かに、福音が全世界に伝えられるという預言をイエス様は行われました。確かに霊的復興によって、福音が世界中に勢よく広まっています。けれども、世界化するまで言っているのかというとそうではありません。私は、もう一つの解釈のほうに偏っています。それは、「神の国だ、と呼ばれているものに中に、悪い種が入って、世界を支配するほどまでになる。」という見方です。空の鳥について、イエス様は天の御国の喩えの中で、それが悪魔を表していることをマタイ伝で見ることができます。それから、パン種の例えば、パリサイ人の偽善であるとかつて弟子たちにイエス様が教えられました。コリント人への手紙にも、罪と不正を表していることが書かれています。

そして何よりも、ここでは前後関係が大事です。手前の17節を見ると、群衆がイエス様の言葉を聞いて、その大いなる御業に驚いている様子があります。イエス様のなされることは、確かに人気を博しているのです。ところが、次、23節を見ると、「主よ。救われる者は少ないのですか。」と尋ねている人がいるのです。もし前者の解釈であれば、イエス様のなされている宣教の働きを見て、救われる人々が大勢起こされると感じなければおかしいです。ところが、その正反対のことを言っている。つまり、「多くの人がイエスに付いていっているが、それは表面的であり、本当に神の国の中に入る人は少ないのではないだろうか。」と疑問に思っているわけです。

ということは、後者の解釈なのです。神の国は、一見、増え広がって世界を傘下に置くような影響力を持つことになる。しかし、それは悪いものが入っているために、それが増え広がっているにしか過ぎない、ということです。私たちは前回と前々回から、群衆の中におけるイエス様の人気には、むしろイエス様を拒んでいるような要素があることを見してきました。「私の遺産相続のために、兄弟に話してください。」とお願いしたりするのですが、それは貪欲の問題であるとイエス様が言われたように、です。ですから、イエス様は群衆に対して、彼らはずいついてきているのですが、厳しい言葉をかけつづけています。群衆にある、その間違いを厳しく正しておられます。

ですから、私たちは非常に注意して、「人気」というものを見ていなければいけません。他の人が言っているから、他の人がしているからという理由だけで、その流れに付いていくことがいかに間

違っているかということです。「2テモテ 4:3-4 というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言うてもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです。」しっかりと自分で考える、そして流れに身を任せるという自分を捨てて、しっかりと主に自分を従わせるということが必要です。

2A 努力して入る狭き門 22-30

13:22 イエスは、町々村々を次々に教えながら通り、エルサレムへの旅を続けられた。13:23 すると、「主よ。救われる者は少ないのですか。」と言う人があった。イエスは、人々に言われた。13:24 「努力して狭い門からはいりなさい。なぜなら、あなたがたに言いますが、はいろうとしても、はいれなくなる人が多いのですから。

イエス様は、山上の垂訓でも語られた、「狭い門から入りなさい」という言葉を、今ここで、エルサレムに向かう旅の中でも語られています。けれども、ここで一言加えておられます。「努力して」という言葉です。これを字面だけ見ますと、あたかも良い行いによって救いを得るように聞こえます。けれども、そういう意味ではありません。これは、群衆に対して絶えず語られている言葉、「自ら進んで」という言葉につながっています。

福音は、イエス・キリストご自身です。この方を受け入れることです。そして、もっぱら神の憐れみによって、罪深いこの私を、その罪を赦し、清めていただき、神の子どもにしてください。そして、滅びゆくこの世から免れ、キリストの立ててくださる神の国に入ることです。しかし、この道は単に多くの人々がしていることに従っているのでは、決して通ることのできない道です。自ら進んで見分けて、自らに神の言葉を受け入れる道です。そこでは自分自身の貧しさを知ります。自分の内に神に反抗する罪があることを知ります。それを悔いて、取り除いてくださるように神に憐れみを請うのです。へりくだること、そして罪を悔い改めること、これが「努力して」という言葉に含まれている意味です。

13:25 家の主人が、立ち上がって、戸をしめてしまってからでは、外に立って、『ご主人さま。あけてください。』と言って、戸をいくらたたいても、もう主人は、『あなたがたがどこの者か、私は知らない。』と答えるでしょう。13:26 すると、あなたがたは、こう言い始めるでしょう。『私たちは、ごいっしょに、食べたり飲んだりいたしましたし、私たちの大通りで教えていただきました。』13:27 だが、主人はこう言うでしょう。『私はあなたがたがどこの者だか知りません。不正を行なう者たち。みな出て行きなさい。』

イエス様は、猶予期間は短いことを教えておられます。救われることのできる時はいつまでも続くのではなく、閉じられる時があります。ちょうどそれは、ノアの時代のようにです。箱舟の戸が閉じられたら、その中に入りたくても入れなくなる時が来ます。

ユダヤ人にとっての救いは、この地上に来られるメシヤが神の国を立てて、その中に入ることであります。そして神の国における特徴は、祝宴であります。みなで喜んで、祝いながら食事を共にすることです。イエス様は、そのことに言及されています。事実、多くの人々はイエス様と共に食事を取ったことがあります。また、イエス様から大通りで教えを受けました。これだけのことをしてもらいながら、それでも「自分自身が」イエスを自分の主として受け入れない限り、その心は変えられておらず、不正のままに生きています。そのため、主が戻ってこられたら、追い出されます。イエス様と一緒に食事をしたり、その教えを聞いていても、それでは不十分なのです。だから、「努力」が必要です。自分を捨てて、この方に主として心にお迎えするというのは、純粋に信仰の行為ですが、信じるためには自分を捨てるのです。

ですから、私たちが日本語で普段使う「努力」と、ここでの「努力」は違います。日本語の努力は、自分の行ないで頑張ることです。けれども、イエス様の言われている努力は、そうした自分の思いを変えることです。自分の内で悶え、悩むことです。自分の高ぶり、自尊心を捨てることです。そして、自分の行ないではなく、もっぱら神の恵みによって救われることを受け入れることです。

13:28 神の国にアブラハムやイサクやヤコブや、すべての預言者たちがはいつているのに、あなたがたは外に投げ出されることになったとき、そこで泣き叫んだり、歯ぎしりしたりするのです。13:29 人々は、東からも西からも、また南からも北からも来て、神の国で食卓に着きます。13:30 いいですか、今しんがりの者があとで先頭になり、いま先頭の者がしんがりになるのです。」

キリストが戻ってこられれば、復活した聖徒たち、イスラエル人にとっては自分たちの父祖、アブラハム、イサク、ヤコブが神の国の食卓に着きます。そこに、その子孫たちが共にその祝福にあずかります。ところが、それはあくまでも「信仰」という、自発的な、個々の近づきがあって成り立つのであり、単に血縁の子孫である、また近くにいた、ということでは保証されません。

神は、ご自分の招きに応答しないのであれば、他の人々をも招いて、その食卓に着かせることをなさいます。ここに東西南北から人々が来ている話がありますが、これは異邦人のことでしょう。ただ異邦人ということ以上に、「近くにいらない、遠くにいる人々も連れてくることができる。」ということでもあります。分かり易く話すならば、いつも聖書のメッセージに触れているけれども、神の国から締め出されることはあり得るし、反対に、たった一つの福音の言葉を聞いてそれに応答しているのであれば、神はことさらにその人を尊んで、祝福してくださる、ということです。神にとって、この応答という行為がどうしてもなく大切なのです。

そこで、しんがりの者が先頭になり、先頭の者がしんがりになるという現実があります。イエス様は、「今」と強調されていますが、それはユダヤ人たちが福音を受け入れられる時が今や過ぎようとしている、ということです。教会の中でも起こりますが、教会に来て間もない人が霊的に成長していくのに、教会に来て何年も経っている人が、いつまでも赤ちゃんのままで留まっている、というこ

とがあります。私たちはキリスト教を自己修練のように考えたいです。年数を積めば、それだけ靈的に受け入れられていると思いたいのです。いいえ、神はキリストにあってすべて人を平等にされます。今、救われたばかりの人も、二十年以上信仰生活を送った私も、全く同じように、子供のように神の愛と恵みを受けるようにされているのです。

3A エルサレムへ哀しみ 31-35

13:31 ちょうどそのとき、何人かのパリサイ人が近寄って来て、イエスに言った。「ここから出てほかの所へ行きなさい。ヘロデがあなたを殺そうと思っています。」13:32 イエスは言われた。「行って、あの狐にこう言いなさい。『よく見なさい。わたしは、きょうと、あすとは、悪霊どもを追い出し、病人を直し、三日目に全うされます。13:33 だが、わたしは、きょうもあすも次の日も進んで行かなければなりません。なぜなら、預言者がエルサレム以外の所で死ぬことはありませんから。』」

興味深い会話ですね、他の福音書にはありません。イエス様はエルサレムの旅をしていますが、まだガリラヤ地方あるいはペレヤ地方にいたのではないかとされています。ガリラヤの国主ヘロデ・アンティパスが、あなたを殺そうとしていると言っています。イエス様に人気が出てきて、それによって騒動が起こるのではないかと、恐れて、イエス様を捕え、できれば取り除こうと考えていたようです。ヘロデは基本的にティベリヤにいました。けれども、イエス様は同じガリラヤ湖周辺でもティベリヤのほうには行かれませんでした。政治的に、ヘロデによって始末される危険があったからです。彼は、あのパプテスマのヨハネを殺した男です。パリサイ人は、親切心と言うよりも、ガリラヤ地方から出て行ってほしいと思って、この状況を伝えに来たのかもしれませんが。

けれどもイエス様は、「あの狐」と言われます。これはユダヤ人にとって、かなりきついことばです。私たちが想像するような「狡猾な者」という意味合いもありますが、あとは「小心者、何でもない者」という意味合いもあります。イエス様は、ご自分の身边に気をつけていましたが、それはご自分の使命を犠牲にしてのものではありません。しなければいけないことはしていけます。続けて、悪霊を追い出し、病人を直し、十分に行われてから、エルサレムに行かれます。そして、死ぬのはエルサレムにおいてである、ということをご存知でした。ですから、神のこの働きはヘロデによって妨げられることはありません。

イエス様のこのバランスが好きです。気をつけるのですが、恐れません。イスラエル旅行に行く信者たちは、しばしばこのバランスを神から与えられます。戦争の噂を聞いたところで、行く意思をくじかれることはありません。けれども、無謀にもなりません。そしてイエス様は、ご自分が死なれることを言及されたので、慟哭に近い悲しみを言い表されます。

13:34 ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者、わたしは、めんどりがひなを翼の下にかばうように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。

エルサレムこそが、神の御名が置かれている町であり、永遠の都と定められたところです。ところが、そこが預言者を殺すところとなってしまった。ここで歴代のユダの王たちが、悪を行ない、預言者を迫害しました。同じように、イエスご自身も迫害されます。

そしてイエス様の心があります。先ほどは、一年間、猶予をくださいと言って肥しをいれる番人の姿を見ましたが、ここでは、「わたしは、めんどりがひなを翼の下にかばうように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか」と言われています。翼で覆うという表現はイスラエルの民に対して神が使われた言葉です。イエス様は厳しい言葉をかけられましたが、その表面的な厳しさとは裏腹に、めんどりが雛を自分の翼のところに集めようとする優しさでありました。神の国に入れたいというのは、唯一、そこに入ることを拒むことだけです。

13:35 見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。わたしはあなたがたに言います。『祝福あれ。主の御名によって来られる方に。』とあなたがたの言うときが来るまでは、あなたがたは決してわたしを見ることはできません。」

紀元後 70 年に、神殿が破壊されます。そして、「祝福あれ。主の御名によって来られる方に。」という言葉は、詩篇 118 篇 26 節にある、主を都にお迎えする時の言葉です。あの「ホサナ」と叫ぶ言葉の次に書かれています。それを主が入城される時に群衆が叫んだのですが、その次に言うことができた言葉を、みすみす見逃したのです。そして、次の機会は「わたしを見る」とありますが、イエス様が再び来られる時であります。その時に、彼らがようやくイエスが来るべきメシヤであることを認めるのです。

私たちは、このような難しい時代に生きていることを知る必要があります。つまり、怠慢になってしまっている時代です。他人事のように悪くなっていく時代を見ている時代です。自ら入ろうとする人がおらず、遅すぎるかもしれないという時代です。イエス様と同じ哀しみの声を挙げるかもしれない時代です。けれども、最後まで救いの機会がある時に人々にイエス様を伝えています。